歴史の時間と自然の時間――『存在と時間』の時間論について

安田　悠介（東北大学）

本発表は、『存在と時間』の時間論の解釈を行う。大きくは、次の二点が問題となる。（１）「歴史性」にかかる本来的時間性と、「配慮的気遣い」の時間性ないしは「世界時間」とが、それぞれ何をどのように指し示しているかを確定し、（２）両者の差異を強調するハイデガーの時間論から、時間についての思索にとってどのような積極的な見解が引き出せるかを論じる。

発表全体を通じて浮かび上がらせたいことは、ハイデガーによる伝統的な通俗的時間概念の批判の真意はどこにあり、そしてこれはどのように引き受け可能な重要な課題なのか、という問題である。通俗的時間、つまり「脱世界化」した「無限な」時間を耐えぬこうと思いを馳せることは、「有限な」人間にとってはいわば越権行為であり、それゆえ、“身の丈に合った”別の時間概念が必要である。このように言うことが、『存在と時間』を通じて出来るように思われるのである。

それゆえ大言壮語かもしれないが、発表者が第一に考えているのは、『存在と時間』をどのように読むか、ということである。無論、ハイデガーの思索をないがしろにした好事家的関心へ堕さないことも同じ程度に肝心であり、そのために、「基礎存在論」の問題、および「本来性」と「非本来性」との区別づけの問題に、必要な限りで論及することを考えている。

発表の構成に関して重要なことを加えて言えば、例えばリクールが『時間と物語』で主張するように、『存在と時間』の独自の性格を尊重し、ハイデガーの他の一次文献への依拠は出来る限り排する方針を採るが、当該の時間論の意義を見定めるために、ディルタイとニーチェを必要な限りで採り上げる予定である。全体の分量としては、『存在と時間』がこの二人に触れるのはごく僅かに過ぎないが、この二人がどのように言及されるかは（ハイデガーがこの二人の影響にあったという事実をさしあたり考慮しないとしても）、『存在と時間』の時間論を確たる視点で読み解くための、一つの視座を与える重要なことがらだと思われる。その意味で、あくまで『存在と時間』の時間論から見たディルタイとニーチェであり、三者を公平な視点から見るような比較研究を意図してはいない。